領域分割モデルに基づく変化述語の考察

酒井　智宏

この論文では、メンタル・スペース理論の枠組みで、変化述語「変わる」、「なる」を含む文の意味解釈について論じる。特に、これらの変化述語を含む文が持つ、従来の指示の理論では記述が困難な解釈を一般原則から導き出すことを目的とする。

第一に、名詞句解釈について提案されている役割・値の概念を相対的な概念として再定義する。

第二に、変化述語「変わる」、「なる」をスペース間操作子として規定する。

これにより、「変わる」、「なる」を含む文の一見特殊な解釈も名詞句解釈についての一般原則から導き出すことが可能になり、これらの述語にはそれぞれただ一つの意味記述を与えるだけで十分であることが明らかとなる。

「変わる」が表すのはすべて値交代であり、この述語が属性変化と値交代の二つの解釈を持つ曖昧な語であると考える必要はない。

「なる」は統語的には同定文もしくは記述文を補文とする非対格動詞である。意味的には、時間軸に沿った前提スペースと断定スペースとが異なることを述べるだけであり、この意味はいかなる解釈のもとでも不変である。

キーワード：メンタル・スペース理論、変化述語、名詞句解釈、役割・値、
スペース間操作子

1　変化述語「変わる」と「なる」の特殊性

Fauconnier　(1985)は、名詞句の解釈に関して、役割・値という概念を提案している。役割とは名詞句の記述内容が与える関数で、パラメータに応じてある値を返す。例えば役割「大統領」は国と時間をパラメータとして、人間を値域とする関数である。Fauconnier (1985: ch. 2)はこの考え方を用いて、(1)のような文の曖昧性を記述している。

(1) The winner will go to Hong Kong.

第一の解釈は、「優勝者であるオリーブは香港に行く」という解釈であり、第二の解釈は「誰であれ、優勝者は香港に行くことになっている」という解釈である。Fauconnierは第一の主語名詞句の解釈を値解釈、第二の主語名詞句の解・

釈を役割解釈と呼んでいる。役割をr、rのパラメータmのもとでの値をvとおくと、値解釈は(2a)、役割解釈は(2b)のように表せる。

(2) a. P(r(m))またはP (v) （「r(m)すなわちvは述語Pを満たす」）
　　b. P (r) （「rは述語Pを満たす値を返すという性質を持つ」）

(1)では「優勝者」がrであり、その値の一つがオリーブである。

多くの名詞句の解釈は役割解釈・値解釈のいずれかであるが、変化述語「変わる」、「なる」の主語名詞句はこのいずれでもない解釈を持ち得る。

(3) 大統領は7年ごとに変わる。

Fauconnier (1985)は(3)の文の曖昧性を指摘している。第一の解釈は大統領である特定の個人が7年ごとに変貌するという解釈（「変貌の読み」）であり、第二の解釈は大統領が7年ごとに交代するという解釈（「交代の読み」）である。Fauconnierは暗黙のうちにこの曖昧性が(1)の曖昧性と同じであると考えているようである。また、坂原 (1996)も(3)のこの二つの解釈をそれぞれ値解釈、役割解釈と呼んでいる。ところが、西山 (1992)、井元 (1995)が正しく指摘するように、(3)の変貌の読みが(1)の値解釈に対応することは確かであるが、(3)の交代の読みは(1)の役割解釈には対応しない。(3)の役割解釈は、「誰であれ、大統領は7年ごとに変貌する」、すなわち、「役割「大統領」は7年ごとに変わる（＝変貌する）個体を値として返すという性質を持つ」という解釈になるはずである。

値解釈とは、役割の特定の値がPを満たすという解釈であり、役割解釈とは、与えられた役割の任意の値が必然的にPを満たすという解釈である。ところが、(3)の交代の読みでは、役割「大統領」のいずれの値も「変わる（＝交代する）」という述語を充足しない。

次に変化述語「なる」を含む文を見てみよう。坂原 (1996)は(4)のタイプの文の曖昧性を論じている。

(4) 大統領が尊大になった。

(4)の第一の解釈は、大統領である特定の個人が尊大になったというものであり、第二の解釈は、尊大な人物が大統領に就任したというものである。第一の解釈が値解釈であることは言うまでもないが、第二の解釈は値解釈でも役割解釈でもない。役割「大統領」のいずれの値も「尊大になった」という述語（(2)のP）を充足しないからである。

以下では、役割・値概念を相対的なものとして再定義し、「変わる」、「なる」をスペース間操作子として位置付ける。これにより、「変わる」、「なる」を含む文の多様な解釈がメンタル・スペース理論で仮定されている指示の一般原則で説明でき、これらの変化述語にはそれぞれただ一つの意味記述を仮定するだけで十分であることが明らかとなる。

2　変化述語「変わる」

2．1　坂原 (1996)の分析

まず、「変わる」についての坂原　(1996)の議論を概観する。坂原　(1996: 149)は、「変わる」の意味を(5)のように記述し、(6)のタイプの文の二つの解釈を記述している。

(5) 「Xが変わる」の２つの要素
　i. Xのレベルの同一性
　ii. Xの下位レベルの差異（すなわち、Xを構成するメンバー間の差異）
(6) 大統領が変わった。
　a. 大統領が交代した。（値交代）
　b. 大統領、すなわちクリントンが変貌した。（属性変化）

値交代の解釈では、Xは大統領、Xのメンバーは個体である。属性変化の解釈では、Xは大統領であるクリントン、Xのメンバーはクリントンの段階（stages）である。坂原（1996）の考えでは、個体とはそのさまざまな段階を束ねた疑似的集合である。このように考えることにより、(6)の一見非常に異なる二つの解釈を(5)によって統一的に記述することが可能になる。最終的に坂原(1996:　174)は「根底では、変化はすべて値交代である」と述べている。これは、(6)の二つの解釈を厳密に区別する西山　(1995)の分析とは根本的に異なる分析である。

筆者は坂原 (1996)の議論は本質的に正しいと考えているが、変化が根底ではすべて値交代であるとする坂原の議論には必ずしも明快でないところがあり、誤解を招きやすい。以下では、坂原 (1996)の分析をベースにして、「変わる」の意味をより厳密に記述する。

2．2　役割・値概念の相対性

まず、役割・値という用語を定義し直すことから始める。Sweetser & Fauconnier (1996)は、役割が相対的な概念であると述べている。例えば、「大統領」は「クリントン」に対しては役割であるが、「国家元首」に対しては値である。一般的な形で述べると、(7)のようなカテゴリー構成があるとき（範列は省略して示す）、Nnを役割とすると、Nnの値はNn+m (m≧1) である。坂原 (1996)の言うように個体がその段階を束ねた疑似的集合であるとすると、(8)のようなカテゴリー構成が考えられる。

(7) $N_0 - N_1 - N_2 - N_3 ...$
(8) 国家元首—大統領—クリントン—クリントンの段階

役割とは、関数としてのカテゴリーの名前であり、値とはそのメンバーのことである。ここでは、役割が相対的な概念であり、(8)において「役割＝大統領」という図式が常に成立するとは限らないことに注意する必要がある。例えば、「クリントン」が役割となる場合もあり、このときは「クリントン」はクリントンの各段階を値域とする関数であるということになる。

役割・値の概念を相対的なものと考えることには明白な利点がある。次の対を見てみよう。

(9) a. フランス大統領は（いつの時代も）尊大だ。
　　b. 現在のフランス大統領は尊大だ。
(10) a. 花子は（いつも）わがままだ。
　　b. 今日の花子はわがままだ。

(9a)、(10a)は主語名詞句で表された役割「フランス大統領」、「花子」が、いかなるパラメータのもとでも必然的にそれぞれ「尊大だ」、「わがままだ」と

いう述語を充足する値を返すという性質を持つことを述べた文である。「大統領」の値は個体であり、「花子」の値は花子の各段階である。(9b)、(10b)は、役割「大統領」、「花子」のパラメータ「現在」、「今日」のもとでの特定の値がそれぞれ「尊大だ」、「わがままだ」という述語を充足することを表す文である。(9a)、(10a)をともに(2b)で表すことができ、(9b)、(10b)をともに(2a)で表すことができるのは言うまでもない。このように、役割・値を相対的な概念とすることで、固有名詞を含む文の意味も役割解釈・値解釈で記述することが可能になる。また、(11-12)のような、複数のパラメータのもとでの値の相違や同一性を述べる文についても、普通名詞と固有名詞を区別する必要はなくなる。

(11) a. 10年前の大統領と現在の大統領は違う。（別の人だ）
　　b. 10年前の花子と現在の花子は違う。（別の属性を持つ）
(12) a. 10年前の大統領と現在の大統領は同じだ。（同じ人だ）
　　b. 10年前の花子と現在の花子は同じだ。（同じ属性を持つ）

２．３　「変わる」の意味

本稿では、変化述語「変わる」の意味を、次のように記述する。

(13) 「Ｘが変わる」の意味
　２つの時間スペースをM1、M2（M1≠M2）、Ｘが最終的に同定する役割をX'とおく。このとき、
　$X'(M1) = a$
　$X'(M2) = b \quad (a \neq b)$
　が成立する。

この意味記述は坂原 (1996)のものとほぼ同一であるが、Ｘをそのままの形で意味構築に参入させない点と、M1、M2という二つの時間スペースを明示的に導入した点、すなわち「変わる」をスペース間操作子とした点に違いがある。以下の二節ではこの二つの点の持つ意義を明らかにする。

2．4　「変わる」の意味と役割・値概念の相対性

前節の意味規定において、Xを直接意味構築に参入させないという点は2.2節で論じた役割・値概念の相対性と関連する。Fauconnier (1985: 40)によると、名詞句は第一義的に役割を表し、二義的に値を指す。例えば、「フランスの大統領」という名詞句は第一義的に役割としての「フランスの大統領」を表し、二義的に「シラク」などの値を指す。この操作はメンタル・スペース理論の屋台骨である(14)のアクセス原則によって認可される。

(14) Access Principle

If two elements a and b are linked by a connector F (b=F(a)), then element b can be identified by naming, describing, or pointing its counterpart a. (Fauconnier 1997: 41)

アクセス原則はコネクターで結合された二つの要素間に働く原則である。「フランスの大統領」と「シラク」を結合するコネクターは役割－値コネクターである。役割・値概念が相対的なものであるとすると、ある要素が役割であるか値であるかは相対的にしか決まらない。確かなことは、文中に現れた名詞句は一義的には役割であるということである。今、「フランスの国家元首」という名詞句がある文の中に現れたとしよう。この役割にアクセス原則を適用することにより、その値である「フランスの大統領」を同定することができる。今度は「フランスの大統領」を役割として再解釈し、これにアクセス原則を適用することにより、「シラク」を同定することができる。同様に、「シラク」にアクセス原則を適用し、「現在のシラク」などのシラクの段階を同定できる。こうして、アクセス原則を複数回適用することにより、「フランスの国家元首」でシラクの段階を指すことができる。一般的に述べると、ある名詞句Xが与えられたとき、Xが最終的に同定するものはXと（複数の）役割・値コネクターで結合されたX'であり、さらにX'は下位カテゴリーを有する限り、役割として再解釈できるということである。もちろん、アクセス原則の適用は任意であるから、XでX自身を同定することができるのは言うまでもない。この一般原則と(13)により、(15)が(16a-c)に示した３通りの読みを持ち、かつ(16d)の読みを持たないことが説明できる。

(15) フランスの国家元首が変わった。

(16) a. フランスの国家元首が（皇帝から大統領に）変わった。
b. フランスの大統領が（ミッテランからシラクに）変わった。
c. シラクが変わった（変貌した）。
d. *現在のシラクが変わった。

(16d)の読みにおいては、「現在のシラク」が(13)のX'にあたるが、「現在のシラク」は(8)のタイプのカテゴリー構成の最下層にあり、生み出すべき値を持たないため、役割として再解釈できない。このため(15)は、(16d)の解釈のもとでは、X'が役割であることを要求する(13)に従った解釈ができず、非文となる。(16a-c)については、(13)の意味記述と役割・値概念の相対性が与えられれば、すべて役割の値が交代する解釈として統一的に処理できる。それは(16a-c)の解釈がそれぞれ、「以前のフランスの国家元首と現在のフランスの国家元首は違う」、「以前のフランスの大統領と現在のフランスの大統領は違う」、「以前のシラクと現在のシラクは違う」という同様のパラフレーズを許すのを見ても分かる。これで、坂原　(1996:　174)の「根底では、変化はすべて値交代である」という主張に理論的根拠が与えられたことになる。

以上の議論は、「大統領」のような非個体を表す名詞句と「花子」のような個体を表す名詞句との区別が言語学的に全く不要であると主張するものではない。問題にしているのは、「変わる」という単一の語彙項目が値交代と属性変化とをともに表現でき、また対応する英語changeなども同様の曖昧性を示すことから、その二つの用法には同一のメカニズムが関与しているのではないかということである。

2．5　スペース間操作子としての「変わる」

本節では、「変わる」のスペース間操作子としての側面を検討する。スペース間操作子とはFauconnier (1985: ch. 5)の用語で、be、paint、think、existなど、意味構築において新たなスペースの設定を要求するタイプの述語のことである。これらの述語の解釈には必然的に複数のスペースが関与することになる。上で提案した「変わる」の意味記述(13)は、M1、M2という二つの時間スペースを含んでいる。

(13)は、役割X'の値がM1とM2とで異なることを明示的に述べている。再び(15)の解釈を取り上げてみよう。今(15)が1990年から1995年の間の変化を述べ

た文であるとする。このとき、1990年が(13)のM1に、1995年がM2に対応する。(15)に対する(16a)の解釈では、役割「フランスの国家元首」が1990年スペースと1995年スペースとで異なる値を取らねばならず、(16b)の解釈では、役割「フランスの大統領」が1990年スペースと1995年スペースとで異なる値を取らねばならず、(16c)の解釈では「シラク」が1990年スペースと1995年スペースとで異なる値を取らねばならない。

同様の文脈で、(17)の文を考えてみよう。

(17) 1990年のフランスの大統領が変わった。

この文には特定の個人（例えばミッテラン）の変貌を述べる解釈しかないが、今やこれを理論的に説明することができる。まず、「1990年のフランスの大統領」を(13)におけるX'とした場合、すなわち、X自身をX'とした場合は、役割「1990年のフランスの大統領」が1990年スペースと1995年スペースとで異なる値を取らねばならない。しかし、「1990年のフランスの大統領」は時間をパラメータに取る関数ではないので、いかなる時間スペースでも同一の値（ミッテラン）を取る。よってこの解釈のもとでは(17)は非文となる。

では次に、「1990年のフランスの大統領」を(13)におけるX、そしてこれと役割・値コネクターで結合されている「ミッテラン」を(13)におけるX'とする。この場合は役割として再解釈された「ミッテラン」が1990年スペースと1995年スペースとで異なる値を取る必要があるが、これはミッテランの二つの段階が異なるということであり、すなわちミッテランの属性が変化した場合にほかならない。結局(17)を解釈するためには、「1990年のフランスの大統領」にアクセス原則を適用するしかないということである。

2．6　アクセス原則の適用可能性

ところが、常に上の方法が通用するとは限らない。

(18) 1990年のフランスの国家元首が変わった。

本来ならば(18)には二通りの解釈が可能なはずである。第一の解釈は、「フランスの大統領がミッテランからシラクに変わった」というもので、この場合は

「1990年のフランスの国家元首」が(13)のXに、それと役割・値コネクターで結合された「フランスの大統領」がX'に対応する。第二の解釈は、「ミッテランが変貌した」というもので、この場合は「1990年のフランスの国家元首」が(13)のXに、それと二つの役割・値コネクターで結合された「ミッテラン」がX'に対応する。しかしながら、第一の解釈は存在しない。これは恐らく、「変わる」の主語位置に生起した「1990年のフランスの国家元首」で「フランスの大統領」を同定するのが困難であることによると思われる。つまりこれはアクセス原則の適用可能性の問題で、(13)の意味記述に対する反証とはなり得ないと考えられる。ここではアクセス原則の具体的な適用条件については検討しないが、少なくとも、(14)におけるaとbとがコネクターで結合されていることが、aの記述でbが指せるための十分条件でないことだけは確かである。例えば、「私の趣味はスキーだ」、「スキーは難しい」という二つの事実が与えられても、「私の趣味は難しい」とは言えない。つまり、「私の趣味」という記述で、その役割・値コネクターによる対応物「スキー」を指すことが常にできるとは限らないということである。

2．7　パラメータ拡張による解釈の増加

先に、(17)には特定の個人の属性変化の読みしかないと述べたが、実は(17)に対しては別の読みも可能である。役割「1990年のフランスの大統領」は各人の信念や映画などをパラメータに取り得る。例えば、この役割は現実スペースではミッテランを値として取るが、太郎の信念スペースや次郎の映画スペースでは別の個体を値として取り得る（井元1995）。そこで、通説では1990年のフランス大統領はミッテランであると思われていたが、後にそれが誤りであり、5年後に本当の1990年のフランス大統領がピエールであることが判明したというような特殊な状況を考えれば、(17)は役割「1990年のフランスの大統領」の値が「ミッテラン」から「ピエール」に変わったという解釈を持つ。もちろん実際には現実に関する我々の解釈が変わったにすぎないが、あたかも役割の値が変わったかのように表現できる。この解釈では、1990年時点の（解釈上の）1990年スペースが(13)のM1に、1995年時点の（解釈上の）1990年スペースがM2に対応する。つまり、1990年についての二つの異なる解釈スペースが関与する。この状況設定にはかなり無理があるが、古い時代の国王などではそう珍しいことではないであろう。また、次のような例でも本質的な違いは

ない。

(19) 1990年のあの事件の犯人が変わった。

(19)は特定の個人の属性が変化したという読みのほかに、1990年に起きたある特定の事件の容疑者、（つまり「解釈上の犯人」）がある人物から別の人物に変わったという読みを持つ。

3　変化述語「なる」

次に第１節で問題にした「なる」を含む文の意味解釈の問題に移る。本稿では「なる」を「変わる」と同様スペース間操作子として規定する。その根拠には、意味的な根拠しかなかった「変わる」の場合と異なり、統語的なものと意味的なものとがある。

3．1　統語的根拠

本節では、「なる」がスペース間操作子であることの統語的根拠として、「なる」を含む文が複文構造をなすことを示す。(20)を見てみよう。

(20) a. 巨人の４番が清原になった。
　　 b. 清原が巨人の４番になった。

まず、(20)を非対格動詞「なる」とその補文からなる文であると考える。非対格動詞であるから、主語は持たない。その構造を示したのが(21)である。

(21) a. [[巨人の４番が清原に]なった]（「に」は「だ」の連用形）
　　 b. [[清原が巨人の４番に]なった]

(21a-b)の補文はそれぞれ(22a-b)である。つまり、(21a-b)では、「なる」の補文としてそれぞれ同定文と記述文が埋め込まれているということである。同定文とは主語の指示対象を割り当てる文であり、記述文とは主語の属性を述べる文である（メンタル・スペース理論の枠組みでの同定文・記述文の記述については坂原1990を参照）。

(22) a. 巨人の４番は清原だ。（同定文）
　　b. 清原は巨人の４番だ。（記述文）

ここで、(23)が示すように、記述文の主語を分裂文の焦点にすることはできるが、同定文の主語を分裂文の焦点にすることはできない（フランス語についてRuwet (1982: ch. 6)が同様の指摘を行っている）。

(23) a. *清原であるのは巨人の４番だ。
　　b. 巨人の４番であるのは清原だ。

(20)の各文の主語（らしきもの）を分裂文の焦点にすると、次の結果を得る。

(24) a. *清原になったのは巨人の４番だ。
　　b. 巨人の４番になったのは清原だ。

これは、(21)の構造を考えれば自動的に説明できる。一般に同定文の主語を分裂文の焦点にはできないのだから、たとえ同定文が「なる」の補文に埋め込まれていても、その主語は分裂文の焦点にはなれない。こうして、(24)の文法性判断は(23)の文法性判断そのものであると結論でき、(24)を説明するのに新たな道具立てを使う必要はない。

(21)の正しさを裏付ける別の事実として「は」と「が」に関する事実がある。(25)が示すように、文の意味を変えることなく(22)の「は」を「が」に置き換えることはできない。にもかかわらず(20a-b)ではそれぞれ同定、記述の解釈を保ったまま「が」が使われている。この「が」は、「彼は太郎が無能だと思っている」といった文に見られるのと同じ、埋め込みの「が」であると考えられる（cf.「太郎は無能だ」）。

(25) a. *巨人の４番が清原だ。
　　b. *清原が巨人の４番だ。

また、「なる」の非対格性を示す事実として(26)のような用法がある。この

文は「よって、「彼女の考えが間違っているということだ」という事態が発生する」という意味であり、「なる」が論理的主語を持たないのは明らかである。したがって(20a-b)においても、それぞれ「巨人の４番」、「清原」は「なる」の論理的主語ではないと考えられ、ここでも(21)が妥当な構造であることが窺える。

(26) よって彼女の考えが間違っているということになる。

以上の議論から、「なる」は、例えば「思う」と同じように、補文の内容が成立するスペースを導入するスペース間操作子であると考えられる。

ただし、「なる」には(27)のような、複文構造をなしていないと思われる用法もあるが、本稿では同定文または記述文を補文とする用法のみを扱う。

(27) 幼虫がサナギになった。
(28) *幼虫はサナギだ。

３．２　意味的根拠

ここでは、「なる」がスペース間操作子であることの意味的根拠を簡単に述べる。一般に、「ＸがＰになる」は「ＸはＰでなかった」を前提とする。つまり、「ＸがＰになる」という表現の理解には常に、「ＸはＰでなかった」と「ＸはＰだ」という二つの事態が関与するということである。前者から後者への変化を表すのが「なる」である。ただし、「Ｘがどんどん／ますますＰになる」のようにある種の副詞が付くと、「Ｘは現在ほどＰではなかった」という前提に変わる。

３．３　「なる」の意味

前節までの議論から、変化述語「なる」の意味は(29)のように記述できる。

(29)「Aになる」の意味（Aは同定文または記述文「XはPだ」）
　時間軸に沿った二つのスペースを順にM1、M2とおくと、
　スペースM1（前提スペース）：¬ A（¬ は否定を表す）
　スペースM2（断定スペース）：A

が成立する。

2.4節で論じた指示の一般原則により、「XはPだ」は直接解釈に参与するのではなく、アクセス原則により「X'はPだ」と翻訳される。これと同定文と記述文の意味構造の違い（坂原1990参照）により、パラメータをMとすると、A＝「XはPだ」は、同定文のときはX'(M)=Pという意味になり、記述文のときはP(X'(M))という意味になる。なお、同定文においては主語名詞句にアクセス原則が適用されることはなく、常にX＝X'となる。

(30)は補文が同定文の場合の例である。

(30) 大統領がシラクになった。

(30)は役割「大統領」がM1でシラク以外の値を取ること（大統領(M)≠シラク）を前提とし、M2でシラクを値とすること（大統領(M)＝シラク）を断定とする文である。(30)に対して主語の「大統領」にアクセス原則を適用した解釈はあり得ず、解釈は一通りしかない。

３．４　値交代の可能性に伴う解釈の多様性

補文が記述文の場合は、興味深い曖昧性が生まれることがある。P＝「尊大だ」とすると、(31)の解釈には(32)に示した二つのスペースが関与する。

(31) 大統領が尊大になった。（＝(4)）
(32) M1: ¬ P(X'(M1))
　　M2: P(X'(M2))

まずX'＝「ミッテラン」とすると、役割「ミッテラン」はミッテランの各段階を値域とするから、(32)は(33)のようになる。次にX'＝(X＝)「大統領」とすると、役割「大統領」は二つのスペースで値を変えることもあるし、偶然変えないこともある。よって(32)は(34)の二通りの場合に対応する。

(33) 1985年スペース: 1985年時点のミッテランは尊大でない
　　1990年スペース: 1990年時点のミッテランは尊大だ

(34) a. 1985年スペース: 大統領であるミッテランは尊大でない
　　1990年スペース: 大統領であるミッテランは尊大だ
　b. 1990年スペース: 大統領であるミッテランは尊大でない
　　1995年スペース: 大統領であるシラクは尊大だ

(33)と(34a)はともに大統領である特定の個人（ミッテラン）が尊大になったという解釈を表しており、実質的には区別できない。(34b)は尊大な人物（シラク）が大統領に就任したという解釈を表す。

(34a-b)は同一の解釈の二つのケースに過ぎないから、当然この差が意識されないこともある。「大統領が年々尊大になる」という文は、大統領の交代があるときは前任者よりも後任者の方が尊大であり、交代のないときは同一の人物が尊大になることを表す。これは二つの解釈が同一の論理構造を持つとする坂原　(1996)の結論と符合する。第1節で見た(34b)の解釈は一見特殊な解釈に見えるが、実は「なる」がスペース間操作子であることと名詞句が関数的性格を持つことから当然予測されるべき解釈なのである。

(35)には特定の個人が尊大になったという解釈しかない。まずX'＝X＝「1985年の大統領」とすると、この役割はいかなる時点でも同一の値を返すから(34b)のタイプの解釈はなく、(34a)の解釈しかない。次にX'＝「ミッテラン」とすると、結局(33)の解釈と同じになり、(35)が一通りの解釈しか持たないことが正しく説明できる。

(35) 1985年の大統領が尊大になった。

しかしながら、2.6節で論じたような特殊な文脈を考えれば、(35)にも大統領交代の解釈が可能である。より現実的な文としては(36)が考えられる。

(36) 1985年のあの事件の犯人が尊大になった。

例えば、問題の事件の容疑者が当初は太郎という非常に気の弱そうな人物であったが、後に太郎は無実であることが分かり、次郎という尊大な人物が容疑者になったという文脈では、(36)に個体の入れ替わる解釈が可能となる。

次に、(37)を検討してみよう。

(37) 日照時間が短くなった。

坂原(1996)の指摘するように、(37)には異なる日の日照時間を比較する解釈しかない。つまり、M1とM2とで「日照時間」が異なる値を返す解釈しかない。(37)の解釈には、「日照時間が短くない」が成立するスペースM1と「日照時間が短い」が成立するスペースM2とが関与する。問題はM1とM2の設定条件である。一日のうちで「日照時間が短くない」状態から「日照時間が短い」状態へ移行することはあり得ないから、M1とM2とは異なる日でなければならない。これは複数の日を含む状況補語をつけるのは許されるが、単一の日を表す状況補語ををつけると非文になるのを見ても分かる。

(38) a. {最近／ここ数日で} 日照時間が短くなった。
　　b. * {9月1日は／今日は} 日照時間が短くなった。

したがって、(37)には異なる日の日照時間を比較する解釈しか残らない。

しかしながら、ここでもやはり特殊な文脈のもとでは、M1とM2とがある意味で同一の日であることもある。例えば、気象庁の9月1日の日照時間に関する公式発表の内容が変更になった場合には、M1＝9月1日時点の（解釈上の）9月1日、M2＝9月5日時点の（解釈上の）9月1日、あるいはM1＝9月1日20時時点の（解釈上の）9月1日、M2＝9月1日22時時点の（解釈上の）9月1日、といった組み合わせも許される。このときには(38b)も許容可能となる。この解釈は(19)、(36)などにおいて見たのと同様の解釈であり、現実に関する我々の解釈の変化があたかも現実そのものの変化のごとく表現されている。

役割・値概念の相対性により「変わる」を含む文に曖昧性が生じることを2.4節で論じた。当然予測されることであるが、「なる」を含む文にも同様の曖昧性が生じる（詳しくは2.4節参照）。

(39) 国家元首が尊大になった。
(40) a. 大統領制から王制に変わり、国家元首が尊大になった。
　　b. 大統領が善良なミッテランから尊大なシラクに変わった。
　　c. シラクが尊大になった。

d. *現在のシラクが尊大になった。

3．5　迂言的変化述語と語彙的変化述語

Matsumoto　(1996)は、迂言的変化述語と異なり語彙的変化述語では値交代に伴う属性変化の解釈（(31)に対する(34b)のタイプの解釈）が困難であると指摘している。

(41) 彼の家の庭が（引っ越すごとに）｛#広がる／広くなる｝。
(Matsumoto 1996: 144)

この事実は、迂言的変化述語がスペース間操作子であるのに対して、語彙的変化述語がスペース間操作子ではないと考えれば簡単に説明できる。前者が補文を取るのに対し、後者が補文を取らないという統語的な事実がスペース構築に反映されると考えるのである。語彙的変化述語の解釈に単一のスペース（つまりパラメータ）のみが関与するとすれば、その解釈に役割の複数の値が関与することはあり得ない。

本稿では変化述語のスペース構築に関して次のような仮説を提示しておく。「変わる」のように変化の存在を表現するだけでその内容を表現しないタイプの変化述語は日本語に限らず一般にスペース間操作子である。「長くなる」、「伸びる」のように変化の内容まで表現する変化述語に関しては、複文構造をなす述語（「長くなる」など）はスペース間操作子であり、単文構造をなす述語（「伸びる」など）はスペース間操作子ではない。

2.4節において変化が根底ではすべて値交代であると論じた。しかし、値交代は複数のスペースの存在を前提とするから、これは語彙的変化述語の表す変化には当てはまらない。そこでこの主張を修正し、複数のスペースにまたがる変化はすべて値交代であるが、単一のスペースのみで起こる変化は属性変化であって値交代ではないと考える。個体の変化は値交代とも見なせるし（この場合は迂言的変化述語が使われる）、属性変化とも見なせるということである（この場合は語彙的変化述語が使われる）。実際、個体の変化の解釈（(31)に対する(33)もしくは(34a)のタイプの解釈）では語彙的変化述語、迂言的変化述語の両方が使える。

(42) 隣家の土地を買って彼の家の庭が｛広がった／広くなった｝。

4　結論

この論文では、変化述語「変わる」、「なる」がスペース間操作子であること、および役割・値概念が相対的なものであることを論じた。これらの変化述語を含む文が多様な解釈を持つのは、これらの述語の曖昧性のためではなく、名詞句解釈の一般原則のためである。

参考文献

Fauconnier, G. (1985): *Mental Spaces*, MIT Press, 1994, Cambridge Press.

Fauconnier, G. (1997): *Mappings in Thought and Language*, Cambridge Press.

井元　秀剛 (1995):「役割・値概念による名詞句統一的解釈の試み」『言語文化研究』21、大阪大学、97-116.

Matsumoto, Y. (1996): "Subjective Change Expressions and Their Cognitive and Linguistic Bases", in G. Fauconnier and E. Sweetser (eds.) *Spaces, Worlds, and Grammar*, University of Chicago Press, 124-156.

西山　佑司 (1992):「役割関数と変項名詞句」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第24号、193-216.

西山　佑司 (1995):「コピュラ文の意味と変化文の曖昧性について」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第27号、133-157.

Ruwet, N. (1982): *Grammaire des insultes et autres etudes*, Paris, Seuil.

坂原　茂 (1990): 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」、『認知科学の発展』第３巻、講談社サイエンティフィック、29-66.

坂原　茂　(1996):「変化と同一性」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第28号、147-179.

Sweetser, E, & G. Fauconnier (1996): "Cognitive Links and Domains: Basic Aspects of Mental Space Theory", in G. Fauconnier and E. Sweetser (eds.) *Spaces, Worlds, and Grammar*, University of Chicago Press, 1-28.